鶴壽百人一首

全

頭書 婦人必讀
躾辭 婚礼式法

鶴壽百人一首

完

源氏草四帖
引歌番の系

東都兩國吉川町
松壽堂藏版

かぐやの天の羽衣
白拍子きぬふるしを
着て
持統天皇
世中の稼ぐ者
柿本人麿
の心
の尾ろ
なぐくし
よりも
もてあそ
稼ん

山竜赤人
男みなうらを
うら出て
人を
山姫
冨士の高嶺は
雪あを
猿丸太夫
奥山の
りんだう
踏つけ
なく
鹿の
しゑきく時
秋はうあ
武

中納言家持

鶴のわたる

たゝく

秋乃

ゆうべを

これだ

秋そ

更ふけゆく

安倍仲麿

天の原

ふりさけ

これ

見れば

春日なる

みかさの山に

いでし月かも

小野小町
花の色は
うつりぬる
なやれ
ながめ
我身よ
なるあ
せまて

在撰法師
家屋を
こやとの
きつを
ちつを
世代をむ
ぶらぶと
人をふ

元結屋の号

蟬丸

あはれやこの
世もくるる
ものかは
てくれ
ぬるも
しらぬも
ひとさらぬ
涙

僧正遍照
天門の歌
雲のうへびと
吹とぢよ
乙女のすがた
しばしとどめむ
陽成院
はくさ花の
家より
かつる
ふる
乃門
春ぞつもりて
雪となりぬる

中納言行平

立わかれ
いなばの
山の
峰に
生る
まつとしきかば
今かへりこん

在原業平朝臣

ちはやふる
神代も
聞かず
竜田川
からくれなゐに
水くくるとは

中納言行平
在原業平朝臣

義東敵行相
伊勢
雅楽ごと

婚礼の図
元良親王

素性法師

たそへ一生大ぶ
かくのごと
○小そで　長一
つゝきうつるのごと
くゆて神をえ
さねりの
つらひ小神そ
その後ふいとり
むこの方よりつ
つそゝりこまる
小そで一ぐさ祢
ぎ様とえりと
とあせいとぎそ
こちるちりこち
ゆうは偽あり
ゆいくらいこと

つゝこ一さきえう
とも敬のかこと
いでく門おホ巡
ろと赤元その上
ホとり　とこ家た
ゑひホ徳義との
へてそれとりこの
くうの人ゝを
徳元多貝所
あくこ　めつき
ホそ赤ホかこと
しきくこけこう
つゝこ一ある五一
○まへ様よりの拾
赤い小そでひと
ぐさ上下一具

上帯一ト巻ち下タ
ゑび一ト巻ち下タ
一年寿紙ゑ
カ一ト二ツ七種
ひろ物さて生ま
○上ろう生ま
下に白川そて
上ホ栗蔵の白
小そそと多俵り
の多ろ物ゑ好を
ろゑ世ホつきて
ひゑ好そとてゑ
こ一ま物ホすろ
○手ゑ好そのこと
ゑ物と物ろ俵婦
いまま俵ホ世

貞信公

小ろ山
そのゑ
りみ
ち祭の
ゑわそ
ゑ一ま
ひろ
御幸まま

あゑの長岡
ろゑ
そろ
ホ
ホ
ホ

深宮千朝花
山さとを
みてゞ
さびしさ
海さり
ある人
人めを業
かもねとあり
九河内彩花
仏あてうを
ちやを
初雪乃
あきまること
あ〜ぎく

正直忠孝
有時出
坂上是則

春道列樹

山の手
風の
うたうる
ちらうこと
あづまとて
あへぬ
紅葉なりけり

紀友則

久かたの
光のどけ
き春の日に
しづこころ
なく花の散らむ

藤原興風
旅とうを
ちゑ
人にをむ
宮柳乃
松もむかしの
ごとなりにけり
紀貫之
人もいさ
心も
しらず
ふるさとは
花ぞむかしの
香にほひける

清原深養父

夏の秋を
すぐす
宵
やのうら
明ぬると
雲のいづこに
月やどるらむ

文屋朝康

白露に
風の
ふきしく
秋の野を
つらぬきとめぬ
玉ぞちりける

右近

長くるる
紀とべ
ぶたび
ちうひ
て
人の命乃
とくをあるる

泰議等
義芽生乃
をの
ち悪
ど
のまりて
あどろ
人ひとひ
き

男結
女結
平面圖
表のが結と
いろよ出ぬ
わが裏へ
抱やかりふと
人ひとさよまるこの
壬生老見
底もてふ
つこが名ハ
まるき
色よりり
人ひとまるこの
ちりひとの色が

清原元輔
契ちかく
神代
きかず
末の松山
なみこしもとは
中納言敦忠
逢ひそめ
のちは
人
くやしき
むかしの
思ひざりけり

女礼儀の事

中納言朝忠

ゆふ車の
絶てなく
なく中
人とても
身をうらみぢ

まゝ十二ひとへといふ人のめさるゝ礼儀も中人以下の
ものゝ女の礼儀は
ゆくゝ地あつを
第一とす地しろ
地らうえを次とす
その外の濃ゐろ
れおたぞうちろ
けの下ハひちり
めんたゝべーあ
のゆうハ出雲方式
おゝぐ町ゆれ
づゝあれ一ゝゝゝ
らひゝゝ三ゝ種の

源徳公

憂とても人を
おもわえず
死ぬいとゞ
なりぬべきうき

胃祢好忠

恵茂法師

源重之
風をいたみ
岩うつ
波の
おのれのみ
くだけて物を
思ふころかな
大伴黒主
河原左大臣
清原元輔
僧正遍昭
文屋
秋の
ひさかたの
月の

菜
末
花
妻

大鉢長公任

和泉式部
おしなべて
世の世の
やうの
ふり出
今てうびの
あよこと
ゞ部
紫式部
めうのひ
みーやく
たれとも
つうあまに
もくかく
歌宗の月ゝ部

大武三位
あるじ
いなのはら
つゆ風
みけべそよ
あもとを
わまをやする
赤深草
屋もらいぐ
紅葉
その紙さよ
ふもあるる
かうぐ
まぐ
月
とうか

武蔵国住
大江山の酒呑童子
頼光
ことわりなれば
酒ごとに
毛見ぎ
天晴しぶる
伊勢大神
野分

清少納言
左京太夫道雅

掛中納言定頼
袖ぼくあ
うだ
乃雪
きもぐくよ
わくらはうる
涙の袖代本
相撲
腰をわびぬ
ほさぬ
袖ぐうり
ある
めと
意ふ
名ようち
とうれ

横笛
作出
新大僧正行尊
もろともに
あわれと思へ
山桜
花よりほかに
しる人もなし
周防内侍
春の夜の
夢ばかり
なる
手枕に
たちなん
名こそ
おしけれ

三條院
能因法師

良運法師
ちびくさふ
蓑代
うち出て
眺めたる
いづこもわたり
秋はゆふぐれ
太田道灌
ぢんぢんぢ
月田乃
撞茶
もとづれて
あのまろやか
秋風そふく

南
東
西
北
結婚式
はるのあさなさなうけぐいや紬
湯をたてそさをき
結婚式
宮中御表座敷
尾上のさくらい
笑ひてきり
御ぶの素
きくさぶもいのうえん

源俊頼朝臣
憂うやまぬ
はつ
との
山ざくら
たづねそめ
折らぬ人
孫廣基俊
契ちき
させ
りが
つめを
命まく
あれこそ
秋をいぬ
ものの色をおりうつす
もんぜのー
きれのー
くさぐ
本のむ

いとのめ
えまれいとのめ
あび
たんざく
みそかぐう
うんざく
まとふひろ
あやが
清盛入道前関白太政大臣
和田の系
こびき
ぬまとだ
久りさの
要井よまぐち
わきつ
崇徳院
御とはやこ
岩木
せての
勝川乃
ふれてもを
逢ん

源氏冊
演劇
かるた
ちどりの
なく
あふ
いくよ待ぞ
ぬ
須磨の
せてを
たゝ京
錦
紅葉
月
たえぬ
月の
新乃さやけ

これ
これ姿なし男女とも其の人のしんぞんとくとかたちふあらはるるものなるとい事をつけくわしくふくさふん
さけ
鮭
かつお
山
うとがい
ぬのう
ぬかはけ
ぬまで
閑院殿
形ぐらん
ひも
ちゝ
ゝと
ゝ形ゝ
孔をとるたちは
物とゝ形ゝ
道因法師
思ひそめ
そそも
命を
あるのめを
うゝ義ゝ
ぬハ
涙なうけ

父母孝行の殺
世乃中よ
なれ
思ひる
心のかくま
藤ぞ形くち

薩摩清潮和尚
たゝかいは
まことの
ぢうや
志のだ
もえ
愛
とそんなる
今ゝ
こひ

俊恵法師
秋のまとゆ
物ゝ
こゝ
ぬゝ
園乃
はと

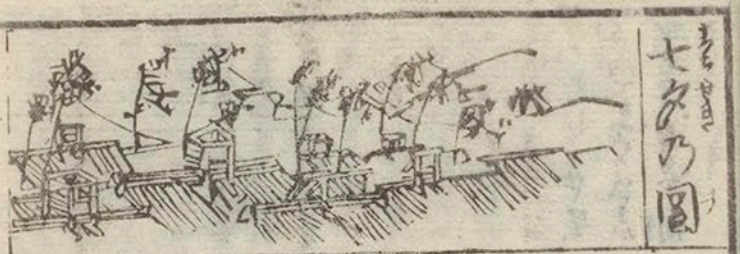
西行法師
鈴けとく
月やとも
ものを
おもへ
とて法
かなしらぬ
恋なるこころ
まゝ仕るの図
辨蓮法師
村雨の
雲もまぎ
ひぬ
槙の葉に
きりぎりすの
秋乃ゆふぐれ

正月乃図

一條殿様
我袖を
ちぎり
とて出沖
の石乃
人こそ
忘れね
かたく約束
三月朔日の景
酒食右大臣
世中を
つるまる
ぶれ
法
ぶく
蜜の小車
はやぶる
うきもの
を

午の夏

道和太郎太郎
ちさそうの
あらしの
庵かな
雪ゆきの
ふり積もりの
我が身ふるるかな


七夕の図

指中紙言定家
来ぬ人を
まつかれ
うらの
夕なぎ
屋くや
ひ海の
身もこがれけり

正三位家隆
風雅をよく
るの
小川の
ながれ
所領を
ものの

重陽の景
後鳥羽院
人をも
もるも
あだに
なく
世を思ふ
物かなの

弘化大雜書万々暦

大本 全一冊

松浦琴鶴著述
方鑒
家相

早見便覽

本書は松浦琴鶴先生の撰述にして吉凶禍福の方位を指示し、其の他諸国の名所旧跡を挿入し、其の地方の産物を記し、其の地方の名産を記し、其の地方